

Title	エンドユーザーコンピューティングにおける問題点と対応策
Sub Title	
Author	出原隆史(Izuhara, Takashi) 柳原一夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1994
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1994年度経営学 第1059号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001994-1059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名

出原 隆史

主査 柳原 一夫

(日本電気株式会社)

副査 古川 公成

河野 宏和

所属

柳原 一夫 研究室

エンドユーザーコンピューティングにおける問題点と対応策

近年、エンドユーザーが「自分たちの業務ツールを、パソコン・ワークステーションといった小型機を利用して、自分たちで開発する」という動きが話題になっている。このエンドユーザーコンピューティング（以下EUC）が今後広まるとすれば、従来のユーザー（DP部門）とは異なった、情報システムの形態と問題点が生じるであろう。EUCの実態を調査し、今後のEUCの方向性を見極めたいという問題意識をもって研究をスタートした。

研究を進めるにあたって、R・L・ノランの発展段階説がEUCにも当てはまると考えた。すなわち①EUCは段階的に発展していく②EUCの発展に応じて組織は学習していく、という仮説を置いた。その仮説をもとに、主にインタビューを中心としたEUCの事例研究を行った。

事例のなかで、数少ない成功体験をもつX社の事例と、先の仮説から、EUCの発展モデルを構築した。モデル構築を通じて、EUCは単にコンピュータの形態が発展してだけでなく、持続的業務改善プロセスの一過程として存在していることを発見した。また、EUCが発展するごとに生じる効果と、コストとがトレードオフの関係にあることがわかった。

次に、EUCの発展モデルに基づいて他の事例を分析を行った。そこで明らかになった問題点を整理し、最後にEUC成功のための提言を行う。